

「あはれ」の復権

河野裕子

小池光の第四歌集『草の庭』が出た。この歌集は、歌の作り方（修辭的技法）、タイトルを選び方、読者へのアピールの仕方、あとがきの、ユニークな文体など、読む者の気持ちを多角的にかき立ててくるものがある。

読んで、まず気がつくのは、「あはれ」と「かなし」の多用である。「あはれ」の使用頻度をしらべてみると、二・四パーセントである。

試みに、この前の歌集『日々の思い出』の数字を出してみた。こちらは、二・八パーセント。ほぼ同数である。『日々の思い出』の時は、「あはれ」、「かなし」はあまり気にならなかった。

「佐野朋子のばかりしろしたろと思ひつつ教室へ行きしが佐野朋子をらず」のような話題性のある歌が『日々の思い出』には幾首かあって、読者の記憶力の比重がそちらにつよく

かかったために、あはれ、かなしの印象が薄まったのだろう。

比してこんどの歌集は全体に平坦な印象を与える。劇的效果が薄い。一首一首の歌は、できうる限り意味性や読者受けから遠ざかったところで作られているように見える。

軒下は枇杷の葉かげにくさりもてボンベ二本のつながれにける

一読、何ということもない歌である。「軒下」と「枇杷の葉かげ」と「くさり」と「二本のボンベ」が偶然そこに在る在りようだけしかいていない。このひどく素っ気ない平坦な印象を与える歌の中に、

一日(日)

元旦の朝にめざめてあはれあはれわがおもふことはきのふのつづき

あかときのみじかき夢にあはれあはれ列

った。数年のち、だれにでもわかる俵万智が現れたとき、私は鮮烈に、小池のこの発言を思い出した。小池光は、作歌を始めた当初から、極めて冷静に戦略的に、歌の読まれ方を、読者の存在を、考えていた人であった。

「あはれ」は、危険なことばである。使いこなすには相当の覚悟と技術力がある。「あはれ」一語のために、一首全体が無化してしまうことが多々あるからである。しかし、一方ではこんなに重要な便利なことばもないのではないか。結句に「あはれ」と付けさえすれば、歌の形は整う。歌らしい歌が、いとも安易にできてしまう。情念的共感によって読者のこころを掴むには一番手近な、確実な方法であるともいえる。千年以上の和歌の歴史の背骨をなしつつ今日に至る「あはれ」。

先に引用した「あはれあはれ」の歌を読んで、だれしも斎藤茂吉の歌を思い出さう。あはれあはれ電のごとくにひらめきてわが子等すらをにくむことあり『白桃』といった歌が反射的に連想される。茂吉こそは、近代現代歌人の中で、最も「あはれ」を多用した歌人であった。

同世代の中で、茂吉をだれよりもよく摂取しているのは小池光だろう。『草の庭』は、茂

車強盗などしてをりき

ほそほそと竹のくだより音出でてひとのこどもの踊るあはれさ

といった歌を読んでみる訳である。「あはれ」の使用頻度二・四パーセントが、同時代の歌集と比べて高いのか低いのか検討していないのにわかにいうことはできないが、私の勘ではこれはかなりの頻度だという気がする。

「あはれ」は、最も和歌的情念記号的なことばであるゆえに、最も警戒されやすいことばである。歌会などでは、まず一番に槍玉にあがることばのひとつだ。めったなことでは使わないのが普通だろう。それを、テクニシャンとしては屈指の小池光が多用している。多用するだけでなく、目立つように使っている。歌集の意志として戦略的に使っているのは明らかだ。

一九八〇年の「現代短歌シンポジウム」の席で、小池光は次のような発言をしている。

「こういう時代には特に、普遍的な存在、類型的な存在感をもった私を、意識的に歌の中で作っていかなければ、歌そのものの存在理由がないのではないか」。

ここで小池は、だれにでもわかる「私」を歌の中で出すことの必要をいつていたのであ

こどもの踊るあはれさ

この何ということもない歌のおもしろさは「あはれ」一語が喚起してくるものであるのかもしれない。小池は、「あはれ」のかわりに、もっと具体的な場や人物の描写力を取り込んだ表現にも習熟しているはずである。そうすることによって、一首の完成度が、ある意味でアップすることも知っている。しかし、彼は、「あはれさ」を結句におくことによって、一首の情念が「あはれ」に収束し、細かい描写の何倍もの力を発揮することも知っているのである。その力に与るには、四句目までの、抑制された何でもない叙述が必要であることも。

「あはれ」の多用は、小池の力量が実現させたひとつの実践記録であって、だれにでも応用できるというものではあるまい。歌集の中の二・四パーセントの「あはれ」は、一首を共感をもって読者へ手渡すための、一つの回路をひらいているのではないか。私は全面的に「あはれ」を肯定するものではないが、これまでほとんど死語化していた「あはれ」による現代短歌賦活へのひとつの可能性を『草の庭』に読んだという手ごたえを感じる。「あはれ」の復権ということを考えるのである。